

## 研究課題 77

# 生活者の視点から考える産業・地域・生活の持続可能性： 実践的な教育・研究の中間報告として

額田 春華・小野寺研太・松梨久仁子・武本 歩未・奥脇菜那子・鯨岡 詩織<sup>1</sup>

### 1. 生活者の視点からの本研究プロジェクトの概観

#### 1-1 はじめに

家族やコミュニティを場として、人と人の関係や人とモノとの関係を総合的な視野でとらえようとする「生活者」の視点は、持続可能な社会における幸せな生活・社会の構築を目指す家政学のキーワードの一つとなっている。本学の創業者成瀬仁蔵は、『女子教育改善意見』の中で、家政学を「国家と家庭、社会・経済構造と家庭の関係を、家庭の側からその位置づけを明確化する学」と位置づけ、この新しい視野と実力をもった婦人の育成を通じ、日本社会の改良・向上に貢献することを力強く打ち出している（宮崎 1995）。研究課題 77 では、家政学のアイデンティティを形成してきた「生活者」の視点に着目し、主に山梨ハタオリ産地の事例に着目しながら、理論と実践の両面から研究・教育活動に取り組んできた。

#### 1-2 山梨ハタオリ産地とはどんな産地か

本プロジェクトが関係を構築してきた山梨ハタオリ産地とは、そもそもどのような産地か。

山梨ハタオリ産地は、富士山の山梨県側の麓、富士吉田市周辺に中小規模の工場が集積した1000年の歴史を持つテキスタイル産地である。江戸時代、幾度となく出された奢侈禁止令のもとで、武士や町人は指定された素材や染め色の衣服しか着ることができなかったが、衣服の裏地で「粋」を競った。この地域の特産、甲斐絹（カイキ）は繊細な上質感で、このような「粋」を競う庶民から人気を博していた。昭和の大戦中は、戦争に使う金属として約9,300台もの織機を差し出すように命令され、織物の生産量はいったん激減する。しかしその後高度経済成長期に入ると、産地で織る布は飛ぶように売れ、「ガチャマン時代」、すなわち、「ガチャッとひと織りすれば1万円儲かる」と言われるほどの隆盛を極めた<sup>2</sup>。

この産地の隆盛は下請け分業構造に埋め込まれることで可能になっていたが、その後国際分業が進み、国内で消費される衣服の国産比率が激減する厳しい環境変化の中で、山梨ハタオリ産地も1970年ごろをピークに縮小の道をたどってきた。しかしその産地が2000年代後半から自律性を取り戻すことに挑戦し、コアなファンをつくりながら再生を進め、小さな工場からユニークな自社ブ

1 本稿は、第1節額田、第2節小野寺、第3節松梨、第4節武本の分担で執筆を担当している。なお、プロジェクト全体は、今回執筆を担当していない他のメンバーとの協力を得ながら実施しているが、この中の6名が代表で今回発表準備を進め、上記4名が本稿執筆を担当した。

2 「ハタオリマチのハタ印」の山梨ハタオリ産地の歴史 <https://hatajirushi.jp/history>（2022年11月20日閲覧）を参考に記載している。詳しくは、このWebサイトを参照されたい。

ランド製品も生まれている。

このような産地の実態への知見をまずは深めたいということで、2020年9月<sup>3</sup>と2021年11月に「ファッションと持続可能性」をテーマにした2回のコンファレンスを実施した。コロナの情勢下、2020年はオンラインで実施したが、2021年には山梨ハタオリ産地の関係者を本学に招いて講演いただいた。現地の布を会場に展示し学生たちが実際に布に触れる体験を持ちながら、グループワークとその成果のプレゼンテーションを実施した。

また2021年前期と2022年前期の「生活と経営学」<sup>4</sup>の授業等でも、学生たちがオンラインでのインタビューと実際に現地を訪問してのインタビューを実施しながら、産地の持続可能性やエシカルファッションの社会的認知拡大、オーガニックコットンの普及などをテーマとしたグループ研究を進めてきた。さらに、本稿の第3節で詳しく説明する現地調査ツアーを2022年9月に家政経済学科と被服学科の合同で企画した。このように本プロジェクトは学科の枠を超えた交流を持ちながら、実物観察・現場での体験を大事にした学習と研究を蓄積してきた。

### 1-3 論文の構成

本稿では、まず第2節で、そもそも視点というものを持った研究の社会的意義がどこにあるのか、また「生活者」の視点をわれわれはいかなる特徴を持つものとしてとらえるのかを整理する。第3節では、2022年秋に家政経済学科と被服学科の教員と学生が参加した現地調査において、どのような活動がおこなわれ、またその成果があったのかを述べる。続く第4節では、「衣服の地産地消への取り組み」、「生産者の顔がみえる消費」に関する社会的貢献を目指して被服学科が中心となり実施している生産者の顔がみえるスワッチブックの取り組み状況を説明し、今後に向けての抱負をまとめる。

## 2. 視点を持った研究の社会的意義を問い直す

### 2-1 視点＝どう見るか？

本プロジェクトにおいて重要な位置を占める「視点」とは、方法論上の観点でいえば、「どのように見るか？」という問題につながっている。そして、「どのように見るか？」という問題は、アプローチと価値判断の二つに分解して考えることができる。

アプローチとは、ある対象を捉える場合にどこに着目するかを指し、価値判断とは、なぜそこに着目するのか、すなわちそのアプローチを取った理由を意味している。例えば、フラワーデザイナーと植物学者が花という対象を捉える場合、両者の「視点が異なる」というのは、フラワーデザイナーと植物学者がそれぞれ花を見る（扱う）アプローチと価値判断が違う事態を指す。フラワーデザイナーが花を見るとき、その人は花の色や形、大きさに着目するであろうし、植物学者が同様のことをするときには花卉や萼のつき方、雄しべ・雌しべの数などをよく見るだろう。このアプローチの違いが生じるのは、二人が花を見るときに「何を重視するか」という価値判断が異なるからで

---

3 なお2020年度のコンファレンスの方は、家政学部学術交流事業として実施された。

4 「生活と経営学」は、家政経済学科の学科専門科目の一つである。

ある。フラワーデザイナーであれば、花を美しく飾るための組み合わせや配列の決定を重視するからであるし、植物学者であれば、花卉の構造や特徴の解明を重視するからである。

つまり、ある対象を取り扱う場合、そのアプローチと価値判断は切り離すことができない。アプローチが違うということは、前提とされている価値判断が違うということであるし、価値判断が変われば、アプローチにも変化が生じるということである。本プロジェクトが研究上の「視点」を重視するのは、単にアプローチの違いにとどまらず、そこで前提とされている価値判断の問題を重く見ているからに他ならない。

## 2-2 科学と価値の関係

科学研究の「常識」では、価値判断の混入は「悪しきバイアス」であると、長く考えられてきた。「科学は価値中立的で公平である」「科学は不偏不党である」という考え方からすれば、「視点」における価値判断、とりわけ女性やジェンダー、環境、資本主義のあり方に関わる政治的倫理的信念を前提に据えるのは、科学研究を歪めるものでしかない、と思えるだろう。

だが、二〇世紀以降の科学史や科学哲学の議論では、「科学は価値中立的で、不偏不党である」という見方に対する多くの批判が展開されてきた。科学は、研究者が抱く信念や前提、社会的文脈、歴史性などと切り離して考えることができないものであり、それらを消去した科学の方が実行不可能であるとする科学無価値論への批判は、すでに十分な蓄積がある。例えばパラダイム論の提唱者として著名なトマス・クーンは、「個人的、歴史的偶然にいろどられた恣意的要素が、常に一時期における一つの科学者集団の所信の形成要素となっているのである」と述べているし（クーン 1962=1971）、フェミニスト経験論者として、経験的探究と価値判断の関わりを長く検討してきたヘレン・ロンジーノは、「科学的知識は、個人間の相互作用を通して構築される社会的知識である」と指摘している（Longino 1990）。

ロンジーノにしたがえば、研究者個人のバイアスや社会的背景が経験的探究の議論形成（証拠と仮説の接続）に作用する点で、科学と価値判断は分かち難い。社会的背景の影響を受けながら生産された科学的知見が、単なる個人の思い込みを超えて客観性を担保されるのは、学術誌でのピア・レビューや学会での質疑応答といった相互検証のプロセスを経るからである。こうした過程を通じて、当初の研究に含まれる諸々の価値判断や社会的制約は、そのコミュニティ内でどの程度容認され得るかがテストされている。当然、査読や質問をする研究者コミュニティも社会的存在である以上、何らかの価値判断やバイアスから自由ではない。科学的知識の客観性はあくまでも社会的に担保されているのであり、科学的知識は同時に社会的知識である。だからこそそれは、常にその歴史性や社会性といった文脈の中に埋め込まれている。逆にいえば、研究者個人やコミュニティの価値判断と結びついていることは、科学研究の科学性を損ねることを意味しない。

## 2-3 科学研究における「ある視点」の有用性

では、科学研究がある価値判断を伴う「視点」を重視することは、どのような積極性を有するだろうか。端的にいえばそれは、新たな知見の創出と既存の議論の前提に対する批判を先鋭化させる

ところにある。

例えば、アフリカ出身の女性研究者が、HIV ワクチンの開発に携わる場合、彼女が無色透明の研究者としてではなく、「アフリカ人女性」であることを重視して研究に臨んだ場合は、何を变えるか (Patricia Hill Collins (1990) を参照)。まず彼女は、先進国での治験に基づいたワクチンが、はたしてアフリカの人々にも同様の効果があるのか、という視点から研究を見直せるだろう。また彼女は、その HIV ワクチンに必要な高い冷凍技術が、電力インフラの不完全なアフリカの諸地域できちんと使えるのか、再考するかもしれない。さらにその者は、アフリカ社会に存在する女性への文化的偏見や経済的障壁が、アフリカ人女性のワクチン接種を妨げる可能性に気づくこともあるだろう。単なるワクチン研究者ではなく、「アフリカ出身の女性」ワクチン研究者であることが、彼女を既存研究の枠組みから「逸脱」させ、それまで注目されてこなかった人種間の相違の検証や保存技術の改良、文化的社会的な接種推奨策の検討といった、新たな研究を遂行させるのである。

同じことは、自然科学だけでなく社会科学にもいえる。フェミニスト研究者による離婚研究の例を見てみよう (Anderson (2004) を参照)。彼／女らはその離婚研究で重視するのは、「離婚は家族の崩壊」とする伝統的 (家父長制的) 離婚観に対する批判的見直しである。伝統的な離婚観を前提にすれば、離婚は悪しきものであり、そこから導かれる研究も、主として離婚の悪影響を検討するものにしかならない。しかし家父長制に批判的なフェミニストによる見直しによって、従来とは異なる離婚研究の視野が開かれる。例えば、人生上のある一点で生じる突発的な悲劇ではなく、そこに至る長期的なプロセスの結果として離婚を捉え、当事者らの感情や考え方の変化にも着目することで、離婚は個人の成長過程や変化への適応過程として見直す余地が生まれる。もちろんこれらの研究は、離婚が「素晴らしい」ものであると推奨しているわけではないし、離婚の肯定的な側面ばかり強調しているわけでもない。むしろこの場合のフェミニストの視点は、従来の離婚研究が見てこなかった側面に注目するというアプローチの変更を通じて、それらが前提としてきた伝統的な価値観に対する批判を展開しているのである。

#### 2-4 「生活者の視点」とはどういうものか

以上の点を踏まえて、本プロジェクトの「生活者の視点」の特徴を整理すると、以下ようになる。まずそれは「視点」である点で、アプローチと価値判断に分解できる。「生活者の視点」的なアプローチとは、「生活に関する諸問題を、科学的に検討する」ことや「生活上の課題を科学的に解決する」とことといえるだろう。では、この視点が前提とする価値判断は何か。すなわち、なぜ「生活者の視点」を重視するのか。それは一言でいえば、ライフ (生命／生存／生活／人生など) を尊重するからである。

本プロジェクトの趣旨に照らすと、この価値判断が含意する批判意識は、次のようなものである。狭義には、従来の衣服産業のあり方に対する見直しである。経済成長を否定しようのない軸とする資本主義社会は、早い段階では国内における都市部と農村部、時代が進めば先進国と途上国の間の分業を通して、大規模な生産・消費・廃棄体制を築いてきた。そうした大規模な生産・消費・廃棄の体制は、絶えず「中核」と「周縁」の再編成を伴う (ウォーラーステイン 1995=1997)。結果と

して現在の日本では、かつて衣服生産を支えた各地の地場産業が衰退し、その産業に従事してきた／する人々の生活や職業のあり方を先細りさせている。本プロジェクトが山梨県富士吉田市の事例を対象とするのは、そのような衰退を乗り越えようとする当地の人々の活動に注目し、そこから、これまでの衣服産業のあり方を捉えなおそうと試みるためである。このことはより広く、近代以降進んできた消費と生産の分断を見直し、二つを結び直そうとする議論にもつながっているといえる。

#### [第1節と第2節の参考文献]

- Anderson, Elizabeth (2004) "Uses of Value Judgments in Science: A General Argument, with Lessons from a Case Study of Feminist Research on Divorce" in *Hypatia* 19(1).
- Collins, Patricia Hill (1990) *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness and the Politics of Empowerment*, Routledge.
- ハタオリマチのハタ印 <https://hatajirushi.jp> (2022年11月20日閲覧)
- 家政学方法論研究会編 (1986) 『ホーム・エコノミックス：新家政学概論』
- クーン、トマス (1962=1971) 『科学革命の構造』みすず書房
- Longino, Helen (1990) *Science as Social Knowledge: Values and Objectivity in Scientific Inquiry*, Princeton University Press.
- 宮崎礼子 (1995) 「日本女子大学創立者 成瀬仁蔵先生の家政学部構想」宮崎礼子・天野晴子『家政学概論—学習の手引き』第2章
- 日本女子大学家政学部家政経済学科・被服学科 (2021) 「2020年度家政学部学術交流事業オンラインコンファレンス報告書 ファッションと持続可能性」
- 日本家政学会家政学原論部会「家政学原論部会行動計画 2009-2018：家政学的研究ガイドライン」<http://genron.net/wp-content/uploads/2012/12/guideline.pdf> (2022年11月20日閲覧)
- ウォーラーステイン、イマニュエル (1995=1997) 『史的システムとしての資本主義 [新版]』岩波書店

### 3. 山梨ハタオリ産地現地調査について

#### 3-1 目的

研究課題77の研究を遂行するにあたり、まずはプロジェクトメンバーである教員と学生が生産現場を知る必要があると考えた。そこで、山梨県富士吉田市郡内地区の各工場を見学し、生産者の方たちのお話を直接伺うことで、現地の状況を実感し、自分自身の関心を広げることを目的とし、次の要領で現地調査を行った。また、見学をするだけでなく、訪問した工場の概要、特長、インタビュー内容、および学生目線で「これからの産地」について考えたことを発表資料としてまとめ、現地の方たちにもご参加をお願いし、『山梨ハタオリ産地の新しい可能性を考える会』と題して、ディスカッションの場を設けた。

#### 3-2 日程について

現地調査は2022年9月5日(月)～6日(火)の一泊二日で行った。引率教員は家政経済学科の額田春華、被服学科の松梨久仁子、武本歩未、奥脇菜那子、鯨岡詩織の計5名である。学生の参加人数は被服学科8名、家政経済学科5名の計13名であった。

9月5日は2グループに分かれ、第1グループは渡明織物株式会社と向原染色株式会社を見学、第2グループは有限会社テンジンと宮下織物株式会社を見学した。

9月6日は午前中に株式会社榎田商店、武藤株式会社、株式会社川栄の3社を見学した。午後に富士山ホールの会議室にて、『山梨ハタオリ産地の新しい可能性を考える会』を開催した。工場見学先からは榎田商店 榎田哲也氏と渡明織物 渡辺明彦氏、富士技術支援センター 五十嵐哲也様氏、装いの庭 藤枝大裕氏の4名の方にもご参加いただいた。

### 3-3 工場見学について

9月5日に4社、9月6日に3社、工場見学をさせていただいた。向原染色以外の6社はすべて織物工場である。各工場の概要を説明する。

#### 3-3-1 渡明織物株式会社

キュプラを使った裏地に特化し、高級な裏地を製造している。郡内地区の織物は先染めが主流で、ストライプやチェックなどの柄の裏地も多く製造している（図1）。また、たて糸にキュプラ、よこ糸にリネンを用いたストライプ生地で、接触冷温感を謳ったこだわりのパジャマを自社ブランドから販売している（図2）。



図1 縦縞ストライプの裏地



図2 自社ブランドのパジャマ  
引用：<https://mehome-wear.com/>

#### 3-3-2 向原染色株式会社

かせ染めを専門とする染色工場、赤・青・黄の化学染料の組み合わせのみで様々な色を表現している。綿、キュプラ、レーヨン、アセテート、ナイロン、ポリエステルなどさまざまな天然繊維、化学繊維を染色している（図3、図4）。40年かけて濾過され、不純物のない綺麗な富士山の伏流水を使用することにより質の良い染色ができるのもこの地域の特長といえる。



図3 かせの染め上がり



図4 高圧染色機

### 3-3-3 有限会社テンジン

もともとは絹のネクタイ生地を製造していたが、服のカジュアル化やクールビズによってネクタイの需要が低下したため、20年ほど前から、シャトル織機を用いたリネンの織物生産に移行した(図5)。現在は自社ブランドを立ち上げてリネン製品を販売している(図6)。また、顧客からの生地注文も受けている。



図5 ジャカード仕様のシャトル織機



図6 自社ブランドのリネン製品



### 3-3-4 宮下織物株式会社

ジャカード織機を利用し、富士吉田特有の細番手、高密度の織物を製造している。60年ほど前からウェディングドレス用の生地を生産を始め、その後、お色直し用の色物、柄物の生地も生産するようになった。現在、それらの生地は芸能人の衣装にも採用されている。しかし、そのことはテレビやネットの画像などで初めて知ったとのことで、自社が生産した織物がどこで使われているかを知らない事実に学生は驚いていた。図7～図9に見学の様子を示す。図7は検反作業の説明の様子である。この産地は分業制で生産が行われているため、商品に不良が見つかった場合、責任の所在が不明になりやすい。そのため、入念に検反作業をするとのことであった。



図7 検反の様子



図8 ストックされた紋紙



図9 織柄データの入力作業

### 3-3-5 株式会社榎田商店

染色された糸で生地を作る先染めジャガード専門の自社工場を持ち(図10)、傘地、服地の2本柱で様々な柄の生地を生み出している。織りの段階でパターン化するという優れた技術も持ってお

り、図11の傘もパターン化により作られた傘である。このような生地が無駄を出さない技術は、今後、サステナブル社会において重要な役目を果たすと考える。

創業当時の生地をアーカイブとして保存している。また、世界中の生地に関する様々な蔵書を専門業者から取り寄せて保管することにより、生地のデザインの伝承、また、新しく作る生地のデザインの参考に使っている。

### 3-3-6 武藤株式会社

取り扱う素材はコットン、ウール、シルク、カシミア、リネン、ラミーなどで、昔ながらのシャトル織機を使い高級感のある細番手の独特な風合いの織物を生産している。また、「分業」ではなく、撚糸、整経、製織、整理加工、検反・検針の工程を自社で行っている。これは、安定した品質が確保、自由な独自開発、コスト削減にもつながるメリットがある。

SDGsに関する取り組みとして「楽しくスカーフ Link」というプロジェクトを行っている（図12）。キズのある生地やストールの残布などを使用し、簡単に着脱できるスカーフを製造、販売している。生産の一部を障がい者就労支援事業者等福祉事業所に委託しており、一般縫製工場と同等の工賃を支払い、利用者のやりがいや自立を支援している。

### 3-3-7 株式会社川栄

ネクタイ製造の工場で、自社でネクタイの柄デザインを行い、デザインしたデータはそのまま織機に落とし込み、生地を製造できるシステムを整えている。見学当日は、整経の様子を見ることができ貴重な経験となった（図13）。30年ほど前から、自社のデザイン資料等をアーカイブズとして保管している。



図10 工場内の様子



図11 自社ブランドの傘



図12 「楽しくスカーフ Link」プロジェクト  
引用元：<https://www.muto-stole.jp/about.html>



図13 整経機

## 3-4 『山梨ハタオリ産地の新しい可能性を考える会』について

3-2で述べたとおり、調査2日目の午後現地の方4名をお招きしてディスカッションの場を設けた。この会の様子を図14、15に示す。そこで学生が発言したことを、いくつか以下に紹介する。

- コロナウイルスの蔓延による活動自粛によって服を買う人が減った。また、社会情勢の影響により価格高騰が余儀なくされるが、取引との関係で値上げを簡単にできない現状を知り、小さな工場が経営を続けていくのは難しい、ということがとても印象に残った。
- 世界中で持続可能性の取り組みが求められているが、商売として成立させるために、コストと環



図 14 学生によるプレゼンテーション



図 15 ディスカッションの様子

境のバランスを考慮することの難しさを感じた。また、そういった面でも消費者が評価していくべきではないかと考えた。

- この産地では分業制で生産が行われているため、一つでもどこかの工程が欠けてしまうと製品がスムーズに作れない。分業ではありながらも、一つに大きくまとまることでのだと思った。
- 国内生産の製品を量産することで、地域で眠ってしまうものを日本中の人に使ってもらえる。それだけでなく、日本の技術を世界中へ発信し、世界中で日本の製品が使われるようになればいい。世界中の人に知ってもらうには、産地生産物のブランド力をあげるべきだ。
- 職人さんらがこれまでに培ってきた素晴らしい技術を次世代につなげる必要がある。そのために若者が産地に興味を持ち、若者の視点から発展させるべきである。スワッチブックがはじめの一步になればいいと思う（スワッチブックについては後述する）。
- 製品やブランド名だけでアパレルの価値を判断するのではなく、生産者の顔が見えることで、愛着度が全く違う。スワッチに会社の HP の URL や QR コードを載せることで、生産者と消費者の距離が縮まる第一歩になると考える。
- 工場見学を通して、各社とも非常に高い技術を持っているが、生産にかかっている手間や「生産者の熱量」を外部に広める機会がないことが認識できた。そこで、「商品に物語をのせて売る」事が解決になると考えた。
- こだわりを追求した結果、製品の値段が高くなる。製品の価値や生産者の思いがあることを知らずに値段だけで判断して購入してしまう消費者にも問題があると思った。

学生の発表に対し、ご参加いただいた 4 名の方からも多くの質問が出され、非常に活発なディスカッションが展開された。ここではページの都合上、最後に頂いたコメントのみを次に紹介する。

- 何よりも大切なのは「知ること」。「若者」は合理的であり、パソコンも使えるので、経験者がルー

ティンになってしまっていることを改革している若者も多くいる。昔とは違う今の生産形態を皆さんと作り上げていきたい。一度概念を壊してもう一度組み直すだけで業界に新しい風を吹き込み、新しく興味を持つ人を増やしていきたい。

- 皆さんの思いや真剣に取り組んでいる態度に対して、気持ちが引き締まった。
- 最近顔色がよく見える傘がよく売れた。改めて販売利益が増加した理由を考えたらず傘とコスメエピソードを伝える宣伝をしていた。エピソードは大切なのだと認識した。
- 最初はこの会の趣旨がよく理解できていなかったが、ディスカッションの内容や発表の内容も充実していて参加して本当によかったと思った。
- 今回のディスカッションの内容が濃く、学生の意見という新しい見方も勉強できたのでとても良かった。

## 4. 被服学科の取り組み

### 4-1 目的

2020年度と2021年度に開催されたコンファレンス『ファッションと持続可能性』で、学生からは、次のような感想が多く寄せられた。

- これまで当たり前のように衣服を買って着ていたが、そこに辿り着くまでには本当に多くの人の苦労や努力があることに感謝しなければならないと感じるとともに、そのような作り手の人々の情報を消費者に提供することは、消費者行動を変えることに繋がると思った。
- 失われた産地名、ブランドの存在をタグに示すことその他、野菜の販売例の様に顔の見える売り方や地産地消のようなものを衣服に関しても行えないか。

そこで、被服学科の取り組み（以降、富士吉田テキスタイルプロジェクトと称す）として、山梨県富士吉田市郡内地区の織物生産において、作り手と消費者がつながるものづくりを提案していきたいと考えた。学生の視点からの日本のものづくりの可能性を探り、国内の織物の素晴らしさを広く発信する方法を検討する。そして、「衣服の地産地消への取り組み」、「生産者の顔がみえる消費」の一助になることを目指したい。

### 4-2 富士吉田テキスタイルプロジェクトの概要

#### 4-2-1 山梨富士吉田市郡内地区の織物の収集とアンケート調査

富士吉田テキスタイルプロジェクトの始動にあたり、郡内地区の様々な布地の特徴を知るため、専門家の助言を基に、布地の収集を行った。収集した布地は、郡内地区のテキスタイルメーカー4社（宮下織物25点、前田源商店31点、楨田商店25点、渡明織物13点）より、計94点である。これらの布地の印象に関するアンケートを被服学科学生42名に実施し、学生に好まれる布地の特徴などを明らかにした。

#### 4-2-2 プロジェクトメンバーと活動

本プロジェクトのメンバーは、被服学科教員5名（松梨、武本、奥脇、鯨岡、大塚（名誉教授））、被服学科2年次10名、3年次4名である。学生を含めた活動は、2022年7月より開始し、月1～

2回、定期的なミーティングを行っている。ミーティングでは、作り手と消費者をつなぐために、どのような活動が必要であるかを検討している。この他の活動として、山梨富士吉田市への現地調査に関する報告会（【4.山梨ハタオリ産地現地調査について】を参照）、布地の特徴を捉えるための物性計測試験に向けた試験片の準備を行った。（図16）。

#### 4-2-3 生産者の顔が見えるスワッチブック

山梨への現地調査、学生を含めた活動を通し、本プロジェクトでは、作り手と消費者をつなぐための方法として、生産者と生産者の顔が見えるスワッチブック（生地見本帳）の作成を目指すこととした。一般的にアパレル業界で用いられるスワッチは、布地に対する情報として、組成、目付け等、最低限の情報のみが記載されており、その布地の産地、作り手、布地の特徴を知るには十分とは言えない。そのため、本スワッチブックでは、布地の生産に関わる作り手、布地の特長に関する内容を充実させ、布地の生産の背景を消費者に伝える役割を持たせたいと考える。本スワッチブックの作成にあたって、どのような消費者（顧客）を対象としたスワッチブックとするのか、どのような布地の特長を伝えるべきか、どのように情報を発信するか、など課題があるものの、完成に向けた取り組みを開始している。

#### 4-3 まとめ

学生を含めた国内織物産地に向けた取り組みが持つ意味として、「国内の織物産地と将来、顧客となる若い世代、また未来のファッション業界を担う学生」を再び繋ぐということがあげられる。この取り組みが国内の織物産地に与える影響は、即効性はないものの、長期的に見通した際に、アパレル製品の生産、消費への消費者意識が国内産地に向くものと考えられる。山梨富士吉田市へ向けた取り組みだけに限らず、この活動をモデルケースとして、他の国内産地への展開を目指す。



図16 被服チームの活動風景  
（左：現地調査報告会、右：物性試験の試験片準備の様子）